

桜蔭俳話会 六月句会 (第二八七回) 桜蔭会館

平成二十二年六月二十七日

- 3点② 点滴に眠りつ卯の花腐しかな 貞勝
 2点① サッカーの思はぬ勝利明易し 与史
 2点 鎌倉に虚子の句展やバラ句ふ 与史
 梅雨晴れ間舟沢連峰影深く 溪水
 梅雨晴間乾いた声の鳥の朝 真三
 はやぶさの帰還の快拳六月や 真三
 沈黙の夏よ牛舎に影のなし 守
 1点① 蜜豆や句友と初の泊り旅 友子
 黒南風や石屋は石の隙に住む 貞勝
 河骨の黄はきぼうの希にぞ通じ 守
 立礼をみてうなづけり杜若 溪水
 1点 ぶれるたび香の立つ薄荷夏燕 ヤエ子
 夏場所は力士賭博で土俵際 佳史
 放蕩の果ての姿やなめくぢり 守
 薔薇から薔薇へ山手散策異国めく 貞勝
 茉莉花や少女のポニーテール揺れ ヤエ子
 老鷲やてすり頼りに段のぼる ヤエ子
 歩み遅く病牛梅雨なか引かれゆく 佳史
 消ゆるまで光りてゐたる蛍かな 守
 眼下には小諸の町よ風薫る 友子
 あやめ舟縁躲し合ひ拍手沸く 貞勝
 黒南風や謂はれ失せたる五輪ノ塔 秀一
 大仏のいつもの笑みや青嵐 ヤエ子
 梅雨句会当季雑詠五句出句 佳史
 青芝や庭先で振るクラブかな 溪水
 ブゼラは大地の響夏の夜 秀一
 燃え尽くる宇宙の塵や苔の花 守

- 梅雨の駅置傘の色とりどりに 与史
 遠雷や帰りを急ぐ買い物客 溪水
 泡ばかり梅雨の噴水流しけり 秀一
 緑陰に憩へば麒麟の咀嚼音 貞勝
 黒板に賢治の伝言蟻の列 友子
 散歩道の紫陽花を生け朝の卓 与史
 紫陽花の花の疲れは切なくて 佳史
 玻璃ごしの若葉ゆがみぬ西洋館 友子
 岩高菰や弁天窟の長祈禱 ヤエ子
 六月の祭りに金魚遊びかな 真三

不在投句 (瀬戸溪水、野上貞勝)

〔通信句会のお知らせ〕

第九十八回通信句会を行いますので、ご投句をお願いいたします。

- 季語 夏期雑詠
- 句数 三句
- 締切り 八月十日 厳守
- 同封の葉書にてお送りください。

- ※ めぐり逢い唄いて涼し気の晴るる 真三
 走り根の階段つづく朝曇 秀一
 少年の素振りのバット夏は来ぬ 与史
 もて余す時間しばしば梅雨に入る 溪水
 掘割の昔斬や梅雨に入る 秀一
 賢治像へかかる蜘蛛の囀はらひけり 友子
 どくだみや天与の臭い避け難し 佳史
 飛ぶ蛍真暗闇に吸いこまる 真三